道徳科の授業の質的向上を目指した道徳教育推進教師の取組

－指導体制の整備と教員のニーズに応じた提案を通して－

前橋市立富士見中学校　　関　　洋輔

Ⅰ　研究の背景

１　道徳教育推進教師の在り方

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説では、道徳教育推進教師を中心とした指導体制について「学級担任の教師が行うことを原則とするが、校長や教頭などの参加、他の教師との協力的な指導などについて工夫し、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実すること」と述べられている。その役割は、年間指導計画の工夫や授業について実施しやすい環境を整えることといったコーディネーターとしての役割から、授業研修の実施や授業を実施する上での悩みを抱える教師の相談役というアドバイザーとしての役割など多岐にわたっている。しかし、他校の教師との交流の際には、「道徳教育推進教師として、具体的に何をすればよいのかが分からない」という声が聞かれた。道徳教育推進教師の在り方を模索している教師も多いという実態がある中で、道徳教育推進教師は道徳教育の目標に向けて学校や学年として一体的に進めることができるように、道徳科の指導体制を充実させることが求められている。

２　勤務校の実態

本校では「道徳教育プロジェクト部会」を設置して研修を進めてきた。道徳教育プロジェクト部会とは、本校校内研修組織の「プロジェクト部会」の一つに位置付けられているものである（図１）。各学年一名以上が所属し、道徳教育推進教師がプロジェクトリーダーとなって、管理職や研究推進委員会と協力しながら、道徳教育に関する校内研修を推進するものである。本校ではこれまで、研修や教科に関する連絡は、隔週開催の研究推進委員会と毎月開催される校内研修全体会の場で伝達を行っていた。しかし、道徳教育推進教師には、授業に関することから、評価に関することなど様々な情報が集まり、それらの内容を効果的に他の教師に伝達しなければならない。効率的な情報の共有をしていくために、プロジェクト部会や学年部会など、既存の学校運営組織を生かしていく必要がある。

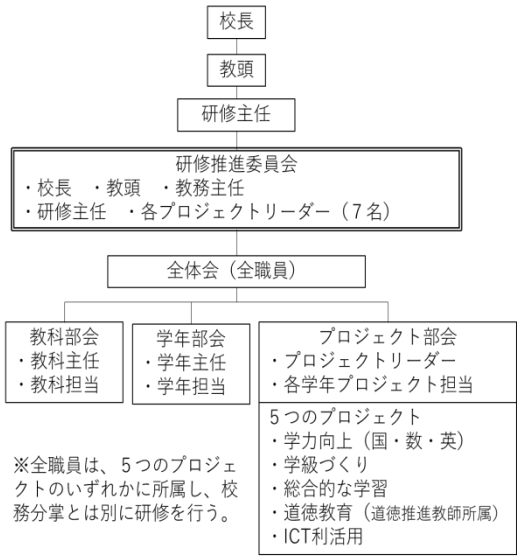


図１　校内研修組織

また、本校は、道徳科の指導において、全学年同一曜日、同時間での道徳科の授業の設定やローテーション道徳を取り入れてきた。担任だけでなく副担任も参加し授業を行っている。ローテーション道徳では、ローテーションの組み方や生徒の学習状況の共有や評価の仕方に課題を感じている教師が多かった。また、ローテーション道徳

は担任の負担軽減のみが強調され、指導面の利点を意識した活用はされていなかった。従来までの画一的なローテーションの方法ではなく、生徒の実態に合わせて、より効果的な指導につながる実施方法を考えていく必要がある。

学習指導要領が全面実施され、「考え、議論する道徳」への授業改善が求められている。道徳科の学習指導に関して、本校の教員にアンケートを実施したところ、教科書の活用や指導方法、評価について不安や困り感を示す内容が挙がった。日々の忙しい教育活動の中において、道徳科の研修は教職員のニーズに応じた授業づくりの支援や指導方法の提案を行うことが必要であると考える。

以上のような課題を踏まえ、本研究では、道徳教育推進教師として、道徳科の指導体制の整備と教員のニーズに応じた提案を行うことにした。

Ⅱ　研究の目的と方法

１　研究の目的

道徳教育推進教師として、道徳科の指導体制の整備と教員のニーズに応じた提案を通して、道徳科の授業の質的向上を図る。

２　研究の方法

(1) 指導体制の整備

道徳科の指導体制の整備として、既存の学校運営組織を活用し、道徳教育プロジェクト部会と学年部会のつながりを強化する。また、これまで本校で行われてきたローテーション道徳を見直し、ローテーション方法の改善を行う。

(2) 教員のニーズに応じた提案

実施した教員アンケートをもとに、道徳科の授業における教員の課題を明確にし、ニーズを把握する。また、そのニーズに応じた支援や指導方法の提案を行う。

Ⅲ　実践内容

１　指導体制の整備

(1) 道徳教育プロジェクト部会と学年部会のつながりを強化

本校で以前から取り組まれてきた「プロジェクト部会」と毎週開催される「学年部会」のつながりを強化し、全職員が参画できる体制を整備した（図２）。道徳教育プロジェクト部会で検討した内容を、各学年の道徳担当教諭が学年部会にて伝達し、その内容を道徳教育プロジェクト部会に持ち帰り、共有したり、検討したりする。このような体制にすることで、校内研修や職員会議など、全教職員が集まるような場を設定することなく情報の共有を行うことができた。

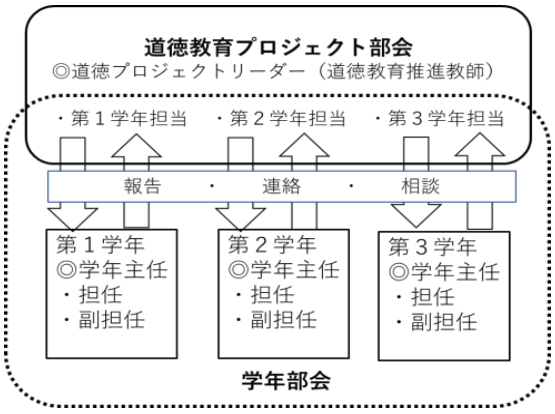


図２　道徳教育プロジェクトと
学年部会のつながりのイメージ

道徳プロジェクト部会の運営については、活動予定を作成し、計画的に実施した（表１）。学年部会を活用する際は、学年で同様の提案ができるように、事前に道徳教育プロジェクト部会を開催し、共通理解を図った。それを踏まえ、各学年の道徳担当教師が学年部会で提案し、検討することができるようにした。また、学年部会での検討結果を、再度、道徳教育プロジェクト部会で見直し、全体へ決定事項として伝えることができるようにした。

表１　道徳教育プロジェクト部会活動内容

実施時期	内容	活用した組織
４月上旬	・ローテーション道徳の計画表を作成 ・一枚ポートフォリオの使用方法について確認 ・教科書、道徳ノートの使用方法について確認	・道徳教育プロジェクト部会 ・校内研修全体会
６月下旬	・評価方法について確認 ・１学期の振り返りの方法について確認	・道徳教育プロジェクト部会 ・学年会
夏季休業中	・教員アンケートの実施 ・２学期のローテーションの提案 ・ローテーション方法、2学期実施教材の確認	・道徳教育プロジェクト部会 ・学年会
１１月下旬	・２学期の振り返りの方法について検討	・道徳教育プロジェクト部会 ・学年会
１２月上旬	・校内研修（ローテーション方法の見直し、生徒の学習状況や成長の様子を交流）	・校内研修全体会 ・道徳教育プロジェクト部会
冬季休業中	・３学期のローテーションの確認 ・教員アンケートの実施	・道徳教育プロジェクト部会 ・学年会
１月上旬	・ローテーション方法、3学期実施予定教材の確認	・学年会
２月中旬	・指導要録への掲載内容の確認	・道徳教育プロジェクト部会
２月下旬	・評価方法について確認 ・３学期の振り返り方法について検討	・道徳教育プロジェクト部会 ・学年会
３月下旬	・今年度の反省と来年度の取り組みについて検討 ・教員アンケートの実施	・道徳教育プロジェクト部会 ・学年会

(2) ローテーション道徳の見直しと改善

ローテーション道徳について年度当初は前年度の方法を踏襲し実施した。夏季休業中には、二学期のローテーションについて、二種類のローテーション方法を提案した（表２）。それぞれのローテーションの特性を理解した上で、各学年の実態に応じて、より効果的な方法を選択できるようにした。

また、12 月の校内研修では、ローテーション道徳の実施状況を共有した（表３）。第２学年から挙がった「評価をする際に、担任が授業をしていない時間があるので難しい」という課題への対応として、校内研修の場で、担任と副担任で生徒の学習状況や成長について交流する時間を設けた（図３）。担任は授業者から生徒の学習状況や成長を聞くことで、通知表での適切な評価を行えるようになった（表４）。また、第１学年から挙がった「行事などと関連させた指導が難しい」という課題への対応として、ローテーション道徳を一時的に解除し、同一の教材を同じ時期に扱うことができるように

表２　ローテーションの提案例

ローテーションA
＜学年すべての教師が同じ教材で各クラスをまわる＞

	１組	２組	３組
○月○日	A教諭 教材①	B教諭 教材②	C教諭 教材③
○月○日	D教諭 教材④	A教諭 教材①	B教諭 教材②
○月○日	C教諭 教材③	D教諭 教材④	A教諭 教材①

○生徒は様々な教師の考えに触れることができる。
○同じ教材の授業を複数回行うことで、指導力の向上につながる。
△同じ教材を扱う時期にズレが生じ、行事と関連させた指導が難しい。

ローテーションB
＜担任が基本となりながら、副担が入る＞

	１組	２組	３組
○月○日	A教諭 教材①	D教諭 教材①	C教諭 教材①
○月○日	D教諭 教材②	B教諭 教材②	C教諭 教材②
○月○日	A教諭 教材③	B教諭 教材③	D教諭 教材③

○担当同士で授業内容を相談することができる。
○継続した見取りを行い、評価につなげることができる。
△授業者は毎時間新たに教材研究をする必要がある。

表３　各学年の実施状況

第１年学年【ローテーションA】
○ 同じ教材を繰り返すので、毎回の授業を改善しながら行えた。
○ 授業者による授業内容のブレがなかった。
△ 行事と関連させた指導が難しい。
第２年学年【ローテーションB】
○ 副担は全生徒を把握できた。○ 担当同士で授業の相談ができた。
△ 評価をする際に、担任が授業をしていない時間があるので難しかった。
第３年学年【ローテーションB】
○ 継続的な指導ができた。　○ 指導法などについて相談できた。
△「他の先生からも授業を受けてみたい」という生徒の意見があった。

図３　交流の様子

表４　交流の内容

・担当した授業における生徒の学びの様子
・一年次の生徒の様子とその変容
・通知表の表記内容

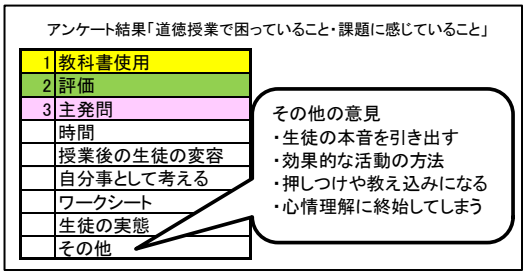
した。人権週間の際には、各学年の道徳担当教師が、全学年がローテーションを解除する計画を立て、全校一斉に人権に関する教材を扱った授業を行うことができるようにした。第３学年から挙がった「生徒から他の先生からも授業を受けてみたいという意見がある」ことに対しては、三学期のローテーション方法を変更し、生徒がより多くの教師の授業を受けることができるようにした。

２　ニーズに応じた提案

(1) ニーズの把握

一学期の道徳授業の実践から課題に感じていることや困り感などについて教員アンケートを実施した（表５）。次に、このように明らかになった教師の困り感を本校の課題とし、その改善のポイントを教員のニーズとして捉え、道徳教育推進教師として以下の三つの提案を行った。

表５　教員アンケートの結果



(2) ［提案①］　道徳教育推進教師による授業公開

本校の課題に対する手立てを提案し、日々の授業に生かすことができるようにした。

授業公開に際しては、指導案と合わせて授業説明プリントを配付し、本校の課題と対応させた手立てが、一目で分かるようにした（図４）。教員アンケートの結果やそこから明らかになった課題、それに対応する手立てや実際の授業の流れを示した構成とした。また、手立てを取り入れた場面や意図を「授業の流れ」に沿って明記したことで、参観する教員が明確な視点をもって参観することができ、授業内での具体的場面を想起しやすくなり、自分の授業のイメージづくりにつながった。

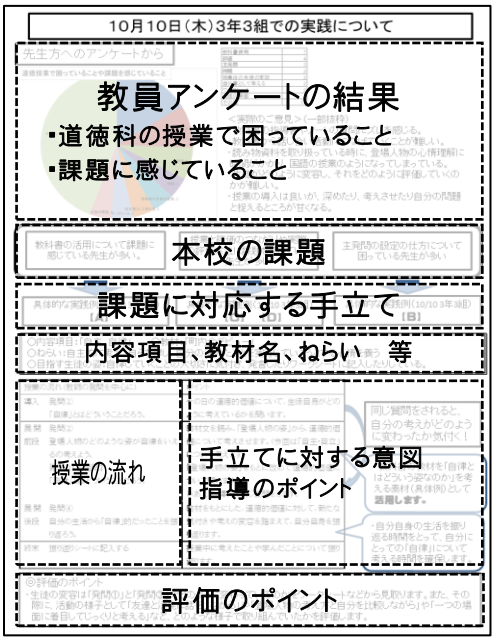


図４　授業説明プリント

(3) ［提案②］　道徳だよりの発行

校内における道徳科の授業の参観、小学校教科別研究授業公開へ参加し、教員向けの道徳だよりを作成した（図５）。ニーズとの関わりがある内容については、「取り入れた手立て」として紹介し、学習指導要領との関わりを合わせて記載することで、実践内容の裏付けを図り、教師の実践意欲を高められるようにした。また、ニーズと直接関わりがなくても、効果的だと思う手立てについても紹介し、授業者の工夫やアイデアを共有できるようにした。道徳だよりを通じて、他の教師や小学校の実践を知るとともに、授業者と指導方法について話をするきっかけづくりを行った。また、道徳だよりをテンプレート化することで、分かりや

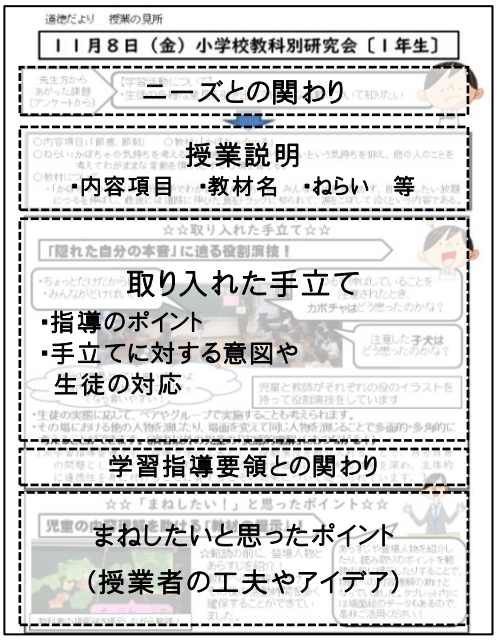


図５　道徳だより　テンプレート

すさ、伝わりやすさを心がけるとともに、発行に関わる負担を軽減できるようにした。

(4) ［提案③］ 道徳科に関する校内研修の実施

本校教師のニーズの多かった「発問」について校内研修で取り上げた。道徳教育推進教師として、様々な研修や教科別研究授業公開に参加した中から、「発問」に関する実践をまとめ、発問の種類や発問構成、具体的な発問例を紹介し、全体で共有できるようにした。

Ⅳ 結果と考察

教員アンケートから、ローテーションＡについては、「一回目の授業を踏まえ、次の授業での手立てを工夫するなど、一つの教材について改善しながら授業を進めることができた」、ローテーションＢについては、「ローテーション方法を選択できたため、担任するクラスで授業を行いたいという教師の願いが実現できた」という意見が挙がった。ローテーションの方法を選択できるようにしたことで、教材研究を深めたり、生徒理解につなげたりするなど、各教師がそれぞれのローテーションのよさを生かしながら指導を行っていることが分かった。

道徳だよりについては、「参考になった」という意見が多く挙がり、「紹介された方法を自分の授業で取り入れた」という声も聞かれた。道徳だよりを発行し、他の教師の取組を伝えることで、各教師が授業の参考にし、道徳科の授業改善への意欲向上につながったと考える。

Ⅴ 研究のまとめ

１ 研究の成果

○指導体制の整備をしたことで、道徳教育プロジェクト部会と学年部会のつながりが強化され、道徳科に関する連絡、相談を機能的に行うことができた。また、二種類のローテーション方法の特性を紹介し、学年ごとに選択できるようにしたことで、生徒の実態や教員の願いに合わせた指導を行うことができ、ローテーション道徳のよさを生かした指導につながった。

○ニーズに応じた提案については、教員のニーズに応じた三つの提案をしたことで、教師が自らの道徳の指導方法について改善を図ることや、道徳科の授業について、教員同士で関わり合うきっかけを作ることができた。

２ 今後の課題

○学校行事と関連した道徳科の授業を計画的に実施できるようにするために、年間指導計画を整備するとともに、ローテーション道徳に組み込んでいきたい。

○道徳科の授業について教員同士が話し合ったり、お互いの授業を見合ったりする機会を多く設定していきたい。